

統計調査員の仕事

統計調査は県民の皆様のご協力がなければ成り立ちません。同時に、調査対象の方に内容をご説明し、ご協力をお願いする統計調査員の役割も重要です。たくさんの調査員のご苦勞に支えられて初めて調査が実施できます。長く家計調査の調査員をお務めいただいている大分市の小野満知恵さんにお話を伺いました。

（小野さんはどういうきっかけで調査員をしていただくことになったのですか。）

私が家計調査の調査員に初めてなったのは昭和61年のことですから、もう22年になります。市役所でちょっとしたアルバイトをしたのが縁で調査員に登録したのが始まりです。苦勞も喜びも色々と重ねてきました。でも、続けてきて良かったと思うことが多いですね。

（苦勞とは、例えばどんなことでしょうか）

家計調査は、同じ世帯に6か月にわたって家計簿をつけていただきますので、調査対象になった人に初めをお願いするときが一番大変です。チャイムを鳴らす時には今でもやはり指が震えます。

まず会ってもらうのが一苦勞です。昼間行っても夜訪ねても会えない。居てもドアを開けてもらえない。ようやく週末にお会いできると、国の調査を休みの日にするはずがないと疑われる始末です。あるときは、老夫婦のお宅が対象になって、随分時間をかけてご説明し、真剣に聞いていただいてご検討された挙げ句に最終的には拒否されたこともありました。このときばかりは帰りに涙が出ました。

でも中には、ご説明する私に対して大変ですねとお氣遣いされることもよくあります。

（苦しいことばかりではないと思いますが）

初めは少々承諾いただいた方でも、数か月経つうちには意思疎通もできて、お互いに良い関係ができていくのが普通です。単身世帯の方の話し相手になって愚痴を

聞いてさしあげることもあるし、お茶をいただいて料理やお花づくりについて教えて下さる方もあります。

対象世帯になって家計簿をつける習慣ができた、家計を見直すことができて良かったとお手紙を下された方もたくさんいます。これまでに調査をお願いしたのは延べにすると200世帯を越えているのでしょうか。10年前にお願いした人に町を歩いていてばったりお会いし、声を掛けていただくこともたびたびです。

(この仕事は小野さんにとってどんな意味をもつのでしょうか)

実は私は子供の頃、ひどく無口で人見知りだったんです。結婚してからも周りの人とは必要なことしか話さない、愛想がない人だと見られていたと思います。それが調査員になってからは人との会話が苦痛でなくなりましたね。世間のたくさんの人に会える、これは自分を見つめ直し相手を知ることにもなります。何より人と話す喜びを知りました。主婦として家庭に籠もっているとどうしても視野が限られて、話すことと云ったら愚痴ばかりになるという話も聞きます。調査員としてそんな自分を変えられたのが良かったですね。

(特に忘れられない出来事がありますか)

私が病気でしばらく入院したことがありまして、調査対象の方がお見舞いにきてくださいました。退院して御礼にお伺いしましたら、なんとその方は癌で亡くなっていたのです。本当にショックでした。

それから、手に障がいのある方で、それでもいつも丁寧に家計簿をつけていただいて感激したこともあります。

(これから調査員になる人に何かお伝えいただくことはありませんか)

調査員の仕事に難しいことは特にはないんです。対象世帯の方と約束した日時をきちんと守るなど節度ある態度がとれて、相手の方の信頼を得ることができれば大丈夫です。多くの方に調査員を経験していただきたいと思います。